和歌

旅十首

そまを

旅にしては家をたもへど家にあれはまた旅を思ふわが身にもあるか

薩摩路の十日の旅を日にやけてふるさとの母を驚かしけり

明日こそは家に歸れとたもふ夜にあやぢくも旅のをぢまるゝかな

旅にして草に寢ねしとつげやらば母いかばかりおどろきまさん

雁の音に露宿の夢のさむるときぞ故里人はこひぢかりける

妻につげず母にもつげず奴となりてろぢやに渡るますらをひとり

海の色山のすがたのかはり果て故國遠くなりにけるかな

日ざかりは村のやしろにひるねして夕月の頃を歩るく旅かな

いもうとが書きし葉書のぶんに曰く葡萄うれたりはや歸りませ

彌治喜多の話に似たる耻もあり旅なればこそ旅なればこそ

夕暮十首のうちに

山寺の入相の鐘の聲の中にこもれる歌をたれかきくらん

夕ぐれに君と手をとり袖なめて磯つたひゆけば思ふこともなし

かはほりは「夜」の使かいつもく夕となればあらはれ來る

遠き〳〵黄泉の國より亡き魂の歸りますといふこの夕まくれ
落つる日のくしき光に彩りて佛畫に似たる夕ぐれの空
この夕聖涅槃に入りますとくしき花ふる御山のあたり
夕顔の今開くよといもうとの我を呼びにくる夕まぐれかな
花も木も野山も川も人も馬もひとつに消ゆる夕まぐれかな

鬼碧星

○

あたし野の露ときえにき人のため夜をこめてなけ野邊の鈴虫
幼子をつれて墓前に香をたく年若き身の尼あはれなり

似非小生の詩五首

しはう

守りませと神のみ前に頸根つきて、ねぎまつらくも敷しまの道
遠つあふみ天の中川雲さわぎ流れさかまく夕立のそら
豐の海の浦の秋かせ吹きもあへず蘆の花ちる大磯小磯
此の里はまた來んところ朝な夕なきゞす鳴くなり花かげにして
秋葉山の春のあらゝぎ根ごき來て鹽漬にする詩人湖村

日本新聞の桂湖村、奇僻あり。客到る毎に風佳なるつけ物を出し、自ら稱して秋葉山の春蘭を、鹽漬にせしものなりといふ。

紅葉會詠草

○

梨雨、錨山人、藤輪、葦舟、外一名

悲しさを慰めかねて岩に坐せば潮りの聲うつ波にあり

靜けきよ羊の聲も今はたえて廣き牧場に夜の幕落つ

今日もまた羊の群れをやしなひて草青きところわれ笛をふく

磯ちかき松の木蔭に夏帽と詩集とありて其ぬし看えず

○

みつ汐のよする渚にひとり立ちて思ふとゑげき夕ぐれの空

山訪ひて新墓の前にわがたては夕日消えゆくみ寺のほとり

夕雲の落ちゆく空をながめつゝ菩提樹の蔭に少女祈りする

葦の間にさわぐ鷺鳥の聲はたえて夕日うするゝ小沼のほとり

この夏は必ずとこそ誓ひてし君はかへらず今日秋たちぬ

鈴の音に松原遠くあけゆきてうばらに匂ふ海の色かな

鉄のごとき六尺男草にいねて母夢みぬとつげこすやさし

○

笛ふきて小川の岸をさまよへば月かげきよく水ながれゆく

さら〳〵と清水ながるゝ岩蔭に一輪ゑめり白百合の花

○

蜻蛉逐うて今かへるらし里の子が軍歌をうたふ聲のきこゆる

夕まぐれ消ゆく森の木蔭より父とよぶ聲のなつかゝきかな

眞ぐろなる森のかなたへ星落ちて山河にむせぶ夜あらしの聲

○

ゆきくれて右にや取らむ左せん問ふ人もあらず猿田彦大神

漢詩

下球麻河　野々口湖海

千古將歌蜀道難。側身西望路盤盤。天窺巖壑依危嶂。舟叩波濤下急灘。棧雨驚猿當岸響。峽雲蒼樹照人寒。辛酸我亦癯如此。不怪愁邊衣帶寬。

八代郡（郡有西征王陵處）

身入南朝國。心懸五百秋。山河八代郡。風雨九州舟。商女猶紅淚。征人欲白頭。都將今古恨。分付水雙流。

富岡

縹緲波濤浮萬松。我遠望之如臥龍。此物深宵喚風雨。吹倒天南第幾峯。

後塞上曲

我已度遼海。辭家萬餘里。故鄉豈不慕。報國志猶在。去年下馬關。破浪浮樓船。風雲一歲月。尺素天邊傳。慇懃書中語。問我塞上苦。那知身如鐵。轉戰歷寒暑。而今將歸去。撤兵仍振旅。一鞭驅鐵馬。可以摧山河。如何聖明世。不復勞干戈。君眼望長城。我血灑胡沙。遼東若鄉土。